医学図書館員の研修

—医学薬学図書館講習会 の発足を中心として—

特集・医学図書館員教育と地区活動

関 口 昌 樹*

初 め に

標記の主題の下に執筆するよう編集部から申し渡されたのは去る3月中旬のことであった。既に現行医学雑誌目録1966年版の編集作業が始まっていた上、一身上の問題も重なり、かなりの重荷と感じながら敢てお引受けすることにした。それは講習会が始まってから年已に久しく、当時の記録は漸次失われ、又直接事に当たった人達の記憶も薄らぎ、遂には全く不明になってしまうことを懸念した為と、更に本年は開講10周年の記念すべき年に当り、加うるに念願の地区講習会開催が実現の運びに至ったこと故、この機会に過去を顧みることによって些かでも将来の発展に資する所があればと考えた為である。とは言え、筆者以上に本題について語るにふさわしい多くの方々を差措いてお引受けしたことは僭越の極みという他なく、又主として時間的關係から之等の方々の御意見を伺うことが出来なかった為、記憶違いや独断偏倚の点も少くないと思われる。関係各位並びに読者の御有恕、御叱正を予めお願いする次第である。

ここで用語の問題について一言つけ加えておきたい。語(又は語群)の包摂概念の範囲、境界を不明確にし、又用法に於て他の語と無法則的に混用することが日本語の特徴の如くに言われ、余韻嫺々とか行間の文字を読むなどという形容さえあるが、文学作品ならいざ知らず、実務に関する文章ではこのような傾向は読者にとって甚だ迷惑である上、読者が

各自主観を混えて種々に解釈するようでは、執筆者の真意が総ての人に正確に伝えられないことになり、執筆者自身にとっても不本意なことであろう。本稿の主題に関する過去の文献を見て行く中、概念上近接して居り且つその相違点を明確に理解することが困難と思われるような用語、用例が幾つか出て来た。

養成、育成、教育、訓練、研修、向上等の抽象名詞に加え、議論の最も基本的な要素と考えられる図書館員、職員、司書と言った語の混用、誤用の例を見ると、我々が日常話し、書く際にも無意識にこの種の混乱を繰返していることと反省させられる。本稿では下記の如く用語の概念を規定し、混乱防止に努力したが、なお習慣的に誤りを冒している場合も少なくないと思う。読者諸賢の御指摘を頂きたい。但し、既に固有名詞となっているものは勿論そのまま使用した(例…文部省図書館職員養成所、医学司書向上育成委員会)。

用語の定義：(図書館)職員……図書館に勤務する者。図書館員……図書館職員中図書館の専門業務を行う者。司書……図書館法に定められた資格を有する者。養成……非現職者に図書館員となる為に必要な教育を行うこと。研修……現職者の再教育及び訓練。(なお、養成、研修共に一定の機関が、多数者を対象として一定の教育プログラム及びカリキュラムの下に行うものに限り、自学自習の類は除外した)。

I 講習会発足前夜の情勢

古諺に言う。「凡そ事の成るは成るの日に

* Masaki SEKIGUCHI, 廣応医学図書館

成るに非ず」と。当協会の主要活動目標の一つである「医学図書館員の向上育成」実現の具体策としてとり上げられ、既に10年連続の実績を積み重ね、年々著しい成果を挙げ、現在協会の継続事業の重要な一環となっている医学薬学図書館講習会発足の頃を顧みる時、今更の如く古人の言を想起せざるを得ない。回顧の頁を繰るに当り、先ず10年前即ち昭和31年頃までの図書館界一般並びに医学を中心とした専門図書館に於て、図書館員の養成研修がどのようにとり上げられていたかをふり返ってみよう。

昭和31年以前数年間の文献の中、図書館員の養成に関するものでは、石田氏が昭和28、31の両年に亘り「図書館雑誌」に各年の概況をまとめたものと¹²⁾、昭和28年の「図書館界」に掲載されたシンポジウム「司書・司書補養成の問題」(英文標題では Problems of Training Professional Librarians: A Symposium)の中、裏田³⁾、森(耕)⁴⁾両氏の論文を挙げられるが、特に裏田氏の批判は13年後の今日でもそのまま当てはまるとされる面が多く、この問題の解決の困難さを改めて痛感させられた。

次に研修については、馬場⁵⁾、津田⁶⁾両氏が本誌掲載の論文中で言及している程度で、まとまったものは見出し得なかった。なお当協会協議題には第22回(昭和24)、第24回(昭和26)の両度に亘りとり上げられ⁷⁾、又各地の研究集会(医学以外)でも協議されたことはあったようである。

このような状況の下で講習会が企画され、しかも急ぎよ実行に移されたことは、一見極めて唐突且つ時期尚早の感を与えるかも知れない。然しそこには以下述べる如き幾多の事情が、表面に現れないまま漸次深刻の度を加えつつあったのである。

(1) 専門図書館の急増

戦後10年を経て、図書館の復興整備の波

は公共、大学図書館から漸次特殊専門図書館へと及び、就中科学技術関係図書館は官庁、公社、自治体、民間企業等凡ゆる方面に於て急激な増加を見るに至ったのであるが、之等の多くは何れも図書館技術的には殆んどゼロに近い状態からの出発を余儀なくされていたと言っても過言ではないであろう。しかも之等の中には、公共図書館や学校図書館新設の場合と異り、開設前既に相当量の資料が存在し、之を各部局で自己流に整理使用していたのを集めて中央図書館(室)新設というケースが少なかった。従って旧来の方法になれた利用者を納得させ賛同を得られるような新しい方法で、之等大量の資料を短期間に整理し利用に供する為に、図書館に関する専門知識と技術の必要性が認識されると共に、所蔵資料が総て科学技術関係の高度に専門化されたものであることから、この方面の知識の習得も希望されるようになった。

(2) 図書館員の確保

このように専門図書館は増加の一途を辿っているのに対し、その運営の重責を担う図書館員はと見ると、大学、企業体を問わず正に寒心に堪えない状態であった。公認の司書養成施設に於ける課程を習得した者の数と必要人員とのアンバランスは、前掲石田氏のデータによって明らかであるが、この不足状態の最も著しかったのは新設大学図書館の分館及び一部の企業体の図書室であった。之は経営管理層の図書館に対する認識不足から本の倉庫的役割りしか与えられず(書庫と形ばかりの閲覧室はあっても事務室がないという例が随所に見受けられた)、又人事に対する図書館側の発言権が微弱な為、定員の枠はあっても図書館の機能を発揮する為に必要な「図書館員」を得ることが極めて困難であったのである。

ここで当時の実例を二、三御紹介しよう。お断りしておくが、之は総て10年 或いはそ

れ以前に筆者が実見した例許りである。

例 1. 某公共企業体直属機関ではある部局の長が図書係を拝命したが、彼の仕事としては平生図書室に鍵をかけ、その鍵を大切に保管すること丈であった。図書室を利用したい者は図書係の許に行き鍵を借りて入室する。従って図書係の不在中は図書室利用は不可能という超 closed system であった。

例 2. 某地方自治体設立の機関では電話交換手が非番の時間丈図書室に勤務していた。御承知のことと思うが、交換手は仕事の性質上長時間連続勤務せず、数名一と組で 1～2 時間ごとに交替し、次の勤務まで若干休憩する仕組みになっているが、この休憩時間に図書室へ顔を出す（文字通りに）のである。どうせ休むなら図書室で休んで居れと言ふ訳か。自治体にしては珍しく能率的な人使いよと些か呆れた次第であった。（後日この機関に用事があって電話をかけ、当方の名を言った所、交換嬢が「先日は……」と挨拶するので面食ったこともあった。）

例 3. 某自治体設立機関では会計課の用度係員というのが毎日午後丈図書室勤務をしていた。彼の仕事は新規受入図書の登録、古い原簿の整理及び以前受入れた図書の登録替え等で、閲覧者が来るとナンバーリングを放り出して行くのである。「図書は備品だから用度係の仕事だって言われたんで……」と彼は苦笑いしていた。

之等の例で当時の状況が御想像頂けたかと思うが、図書館員の定員増とか質的向上とか言う以前に、図書館機能の最低線を維持する為、常勤図書館員の確保と訓練の為に何等かの手が打たれねばならない状態であった。

（3）図書館資料の拡大と利用の高度化

科学技術方面の各分野に於て戦後頓に著しい傾向として、一分野内の特殊な部門への細分化、各部門の綜合協力、更に学問技術の体系上近接した所謂関連分野との交流が挙げら

れるであろう。この為中には従来想像もされなかった「畑違い」の分野との交流さえ見られるようになった。このことは従来屢々論ぜられ、本誌に於てもとり上げられている故詳説を省くが、之が図書館員の研修を求める大きな動機の一つとなったことは明らかであると言えよう。

図書館員となった動機を訊ねられた際、「本が好きだから」と答える人の多いのは、恐らく古今東西を通じて共通の現象であろう。嘗ては之が図書館員の最大の要件と見做され、図書館業務に関する専門的教育を受けなくても、「本好き」でさえあれば見様見真似或いは自己流のやり方で最小限の仕事は出来た。然し前記の如き資料、利用両面の発展の結果、素人芸乃至自己流では利用者の要求に応ずることは愚か、資料の収集整理管理と言った最も基本的な業務をこなすことさえ困難になって来た。この傾向は研究のテンポが早く、利用者からのつき上げの強い技術関係の図書館に於て特に著しく見られたようである。

元来、この当時の技術関係特に企業体の情報担当部局（図書室、資料課、情報課等種々な名称がつけられている）に対する人員配置方法は、各部局からの交代出向（多くの場合期限つき）か、老令、健康上等の理由から現場の勤務が困難乃至不適當とされた者の配置転換が多かったと聞いているが、何れにせよ一種の姥捨山の人事と見られ、廻された当人も技術方面の専門知識さえあれば図書館など訳はないと多寡をくくり、骨休めの気分が入った例もあったようである。現に筆者は幾人かの技術畑出身の図書館員からこうした述懐を聞かされたものであるが、之は程度の差こそあれ大学その他の専門図書館でも或いは見られた現象ではないであろうか。

然し専門図書館の仕事がそのように呑気なものでないことが次第に明らかになり、特に

利用者の要求が強まるにつれ、何とか勉強しなければという気分になり、現職者の再教育——研修の必要が論ぜられ、その実現が望まれるようになった。

(4)「司書」との関連

之は実際に起った例としては前3者程多くはないが、図書館員の信用、他部局員との心理的關係からいっては経営管理層の図書館に対する認識にも影響を与える点で重要な問題を提起した(現在でも一部では問題となっている)。之は冒頭に述べた用語の概念上の混乱が原因である。即ち「司書」とは図書館法で定められた図書館業務を行う能力を有する者に対し国が与える資格名であるが、この法律でいう図書館とは公共図書館(社会教育法第9条第1項)に限られて居り⁹⁾、他の種類の図書館は対象外である。従って本法で図書館業務を行う能力ありと保証するのは公共図書館に関してのみであり、換言すれば本法で保証された者即ち司書資格を有する者の総てが、公共図書館以外の図書館に於ても、その図書館が基本として要求する業務を行い得る訳ではない。既に本法が施行された当初から、その名称を「公共図書館法」とすべきだという意見があった由であるが、それを漠然と図書館法とし、恰も本法が総ての種類の図書館を対象とするかの如き印象を与えたことと、司書という以前から一般に使われていた用語を、特殊な技能を有することを国が保証する職能認定資格の公式名称として使用したことが、図書館を除いた一般社会の人々に誤解と混乱を起させる結果となった。

元来、管理層の図書館に対する認識不足はあらゆる機関を通じて見られる所で、図書館と言えば国会図書館も僻地の分教場の図書室も更には JICST の如き情報センターまで何も彼も引つくるめて考える傾向があるのに加え、上記の名称がもたらす印象から、司書の免状を持つ者ならどんな種類の図書館へ行っ

ても就職第1日目からバリバリ仕事出来る筈だという、図書館側からすれば甚だ有難迷惑な期待を持ち、人事担当者を督励して「司書探し」をした例も少くない。然し当然の事ながらその期待は、特に科学技術関係の専門図書館では殆んど総ての場合、完全に近い程裏切られる結果に終わった。ここに哀れを留めたのは、このような外れの期待を以て迎えられているとも知らずに就職した司書氏(又は司書嬢)である。「この位のことが出来ないなら何も苦勞して探さなくても…」「肩書き許り偉そうにつけて…」こんなささやきが陰に陽に聞えて来るようになっては、如何にデラックスな雰囲気職場も針の簾であろう。しかも単に肩書き丈ならまだよいが、之に待遇の問題がからむと事は一層面倒になる(この場合司書の方も責の一半を担わねばならないかも知れないが)。それは司書が就職の際、或いは図書館員が就職後司書講習を受け資格を得た際、職能給又は技術手当を要求してそれが認められた場合である。司書に対しこの種の特別加給を認めるか否かは企業体、機関によりまちまちで一定していない。技術(又は技能)という兎角特殊な機械道具の操作がつきものの如くに思われ勝ちで、司書の業務を技術と見なすことについては、現在でも一部ではかなり障害が存する故、10年前は一層困難であつたろう。それが上司の特別な配慮によって認められ、しかもその後職場での成績が前記の如き状態とあつては上司の責任問題にまで発展し兼ねない。

当時筆者はこのような窮境に立った司書の人達から幾度も事情を打明けられ、相談を受けた。然し如何に対策を考えても、所詮は「実力をつける」という平凡な結論に到達する途しか残されていなかったのである。

II 研修の萌芽

—医学図書館研究会の発足—

(1) 都内医学図書館の実態調査

以上長々と当時の事情を述べたが、このような情勢に促され、図書館員の確保、資質向上、研修等に対する要望を含めて、各館から協会に援助を求める声は日を逐って盛んになって来た。

「図書室へ廻されたけれど何も分らない」「お前は司書だからと言われるけれど、図書館のことより科学の知識がなければ…」「古い資料の整理に追われて新しいものまでは手が廻らない」「私のような技術屋は目先の仕事に必要な資料のことは知っているが、参考図書や二次資料の方は弱くて…」

こうした種々様々な訴えやら相談やらが協会特に中央事務局のおかれている東大と都内加盟館中の先輩格である慶大に持ち込まれるようになった。之等の相談は直接の場合もあり、他のルートから間接的に入って来る場合もあった。後者の例としては、専門図書館協議会やドキュメンテーション関係の集会で出された問題が主催者から伝えられたり、文部省図書館職員養成所（現図書館短期大学）から同所の出身者に起った問題の中医学関係のものについて相談を受けたりした。然しこのような場合、管理層と司書側の双方から話を聞けば両者の主張の食い違うのは当然で、こうしたケースが次々に起って来ると、どうしても現場を見て実情を把握する必要があるが起って来る。一方、医歯大加盟（昭和 23 年）以来暫く杜絶えていた都内医大図書館の加盟申込みが 26 年頃から連続し、その都度中央事務局が中心となり既加盟館が加わって実地視察し、総会における審議の参考とする慣例が出来上りつつあったが（之は後年「入会加盟に関する細則」中に明文化され現在も行われている）、この実情調査を入会加盟申込館（当時は医大に限られていた）以外にも拡げ、少くとも協会が援助を依頼された医学図書館の実態を知っておく必要があるという意見が強

まって来た。当時図書館員の身分、研修等の問題解決の推進的役割りを果たしたのは中里（東大）、佐野（慶大）、黒川（千葉）、小林（慈恵）、雨宮（医歯）の諸氏で、中里氏は中央事務局、佐野、黒川両氏は協会及び養成関係、小林氏は協会及び薬学その他技術関係、雨宮氏は文部省及び国立大学関係が主な活動範囲であった（別にこうした分担が出来ていた訳ではないが）。なお当時の草間協会長（慶大）を始め、北村（東大）、緒方（東大）、岡田（医歯）、武藤（医歯）、原（東医大）、杉本（慈恵）、吉岡（東女）各館長の御指導、御配慮を忘れることは出来ない。養成所を出て間もない筆者は専ら使い走りであったが、諸先輩の協議の末席に連っている中に問題の輪郭、重要性がおぼろ気ながら分って来、及ばずながら手の届く範囲で調査し、又耳に入る情報は総て協会へ伝えるよう努力した。

何分当時の記録が殆んど見当らない為、実態調査が何時どのような形で始まったかを明らかにし得ないのは甚だ遺憾であるが、何れにしても現在の加盟申込館に対して行っているような組織立ったものでなかったこと丈は確かである。之は一つには、之等の相談が協会というより東大とか慶応とかいう個々の館（特にその主任司書）に持込まれ、それに対する指導助言も、個人的な、今日流行のマンツーマン方式で行われた為で、従って協会として定めた実施要項はなく、又後日協会に対して報告する義務もなかった次第と思われる。

一方筆者は昭和 29 年以来東京医大中央図書館（現在の久保会館）に勤務中であったが、前記の諸情勢に刺激され、時間的に多少恵まれていた（たとえば当時同館では暑休閉館が認められていた）のを利用し、都内の医学関係図書館巡歴を思い立った。当時大学以外の機関の図書館（室）に関する資料は皆無に近い状態であった為、先ず対象として選んだ機関のリストを作り、その電話番号を調

べ、電話で図書室の有無、図書係の氏名(前記の如く部局長その他のスタッフが兼任している場合が少くなかったので)等を確認した上出かけて行った。今そのリストが残っているが、それによると巡歴箇所は次の通りである。

大学(医学)12 東京医大を除く都内10館及び千葉、横浜

大学(歯学)2 東歯、日歯

研究所8 北研、公衆衛生院、予研、伝研、栄研、癌研、労研、生物科学研(立川)

医師会1 日本医師会

病院15 国立東京第一、同第二、国立世田谷(現国立小児)、東京通信、関東通信、日赤中央、東京警察、東京鉄道(現中央鉄道)、専売公社東京、厚生年金、三楽(教員関係)、都立駒込、同広尾、同松沢。

勿論実地調査やインタビューに関して勉強した訳ではなく、質問事項、記録方法等総て自己流という極めて準備不十分な状態で出かけた為、調査結果は区々で中には殆んど記録に残っていないものもあり、ここにまとめて挙げ得る程の成果を残し得なかったことは残念であるが、唯一つ収穫と言えるものがあるとすれば、それは当協会の存在、目的、活動状況等を宣伝して歩き、それに対する反応を確認できたことであろうか。大学及び幾つかの大きな機関を除き、このリスト中の大部分の図書館は当時全くの揺籃期で、勤務者1~2名それも前記の如く専任職員がいればよい方と言った具合であった。従って働いている人達も、仕事は多くむずかしい上、他部局と仕事上の関連が乏しい為孤立し勝ちとなり、不安と寂寥に包まれて居り、一見して暗く重苦しい雰囲気を感じられる所が少なかった。然し筆者の話を開き、そういう団体があるならと明るい希望を持つようになったと後日洩してくれた人が幾人かあった。事実、医学図書館研究会(後述)が発足し参加を呼

びかけた所、上記リスト中の約2/3の機関から反響があった。之等の機関は爾来研究会を始め講習会に或いは現行医学雑誌所在目録に参加協力され、中には既に準会員となった館も出ている。

些か手前味噌を混えたような形で貴重な紙面を汚し誠に申し訳ない次第であるが、研究会発足前の状態は大約以上の通りであった。

(2) 医学図書館研究会(昭30. 2. 21発足)

本会発足の経緯については本誌2巻1/2号のニュース・各地だよりの中に記事⁹⁾が出ている。地区別の会合では既に2年前の昭和28年に九州地区で開かれて居り、本誌1巻4/5号)¹⁰⁾、東京地区でも之まで縷説した経緯に加え、各地の情勢に刺激され次第に機が熟して来た。発会の動機は上記ニュースに於ける中里氏の極めて簡明な叙述に明らかな通りで、吉岡孝治郎氏(東北大、本会名誉顧問)が上京されたのを機に、同氏の欧米視察の思い出その他豊富な体験談拝聴の為の会合を企画したのがそもそもの始まりであった。最初は大学士の会の予定であったが、途中で大学以外の機関の人にも聞いて貰ってはと言うことになり、上記の筆者のリストなどを参考に急きよ名簿を作り呼びかけたと記憶している。ニュースにもある通り、名称さえ決めていなかった程で、正式の会としての準備は全然なく、自然発生的とでも形容すべき状態であったにも拘らず、第1年目に当る昭和30年に4回、翌31年以降も少くとも年3回は開き、その都度大学以外の医学関係機関の参加を見相当の成果を得たと信じているが、ここでは本稿の主題である講習会発足との関連についてのみ述べることにする。

III 講習会開催決定から実現まで

筆者の記録によれば、講習会開催が具体的な問題としてとり上げられたのは第6回の医

学図書館研究会 (昭 31. 5. 21. 於順天堂大)の時であった¹¹⁾。この日の中心テーマは「医学図書館専門司書の教育」で、TAH (Tokyo Army Hospital) 主任司書 L. F. Davis 女史及び慶大津田氏の講演があり、特に津田氏は参会者との質疑応答の中で、日本に於て講習会開催の際の案をかなり具体的に述べた。この中で幾つかの基本的な問題が浮き彫りにされたが、その第一は医学専門科目として何をどのようにとり上げるかであり、第二のより重要な問題は、日本の場合図書館の基本的教育を受けていない人が非常に多いが、この人達の為に図書館業務に関する一般的なコースを設けるべきか否かであった (津田氏の講演要旨は本誌 3 巻 3/4 号に掲載¹²⁾。なお後日之を敷衍したものに「専門図書館員の教育」¹³⁾ 薬学図書館 6 巻 1 号がある)。

今にして思えばこの日の会合が、講習会の歴史にとって記念すべき出発点となった。と言うのは、海外の講習会に関してはその前年本誌の創刊号に谷山氏 (当時大阪市大) の米国における実例の紹介¹⁴⁾が掲載された他、各種の会合の際耳にする機会はあったが、何れも「海の向うのお話」という丈で、我々の問題としての実感は湧かなかった。この第 6 回研究会の前の準備打合せでも、教育研修をテーマに選んだものの、それ以上日本で開催する為の具体策検討に発展させるなどということとは全然話題にも上らなかったと記憶している。それが会の進行中に何時とはなしに「日本でもやれそうだ」という気分が起り、更に「やらなければ駄目だ」と迄発展したのである。勿論単なるはずみやムード丈で事が始まる訳ではない。再三述べた如く、そこに至るまでには種々な要因の積み重ねがあり、又それがあったればこそ研究会のテーマとしてとり上げられるようになったのである。ともあれ、事態は研究会世話人達すら予想もしていなかった方向へと急速に進んで行った。この

会から丁度半月後の 6 月 11 日に小林、津田両氏及び筆者が集まり協議した結果、計画は更に一步具体化した。次に掲げるのはこの日の筆者の記録である (ほぼ原文のまま)。

医学図書館研究会打合せ (注: まだ講習会が表面に出ていないことに御注意)

慶大ワークショップ

1. 定期刊行物
2. 写真複写

米国の例

高等科 (一般司書課程修得者)

1. 文学
2. 各分科

最初の 1 時間、専門の学者が各科の概念、研究領域及び成果等の outline を教える。その後 Librarian が各科に関する Handbook その他を講義。

講習会案

1. 一般的な問題 (自然科学一般を含む)
資料… *Encyclopedia, Dictionary, *History, Textbook, Journal, Index & Abstracts. (*印は第 2 義的に扱うもの)

実務… 目録、雑誌、分類、管理 (原簿、室内建築)、出版社、製本、パンフレット、Circular、貸出、相互貸借、参考、複写

利用者の立場… 浅野講師 (慶大)

用語の説明

2. 会場 慶大北里図書館
3. 期間 8 月中の毎日曜 (5 日, 12 日, 19 日, 26 日)
時間 10 時~17 時 (開場 9 時)
4. 会長 草間慶大医学部長
訓辞 佐野 (慶大)
5. 各科の講義

	概説	文献
生理	阿部 (慈恵)	小林
細菌	牛場	津田
化学	伊藤 (東大薬)	村上 (富山大薬)
内科		関口

外科

文献講義の内容

Suggested reading, Guide to the literature, Histories, Dictionaries, Terminologies, Encyclopedia, Bibliographies, Reviews, Pharmacopoeia, Textbook, Periodicals.

之を実際に行われたプログラム¹⁵⁾と対比すると、期日及び講師に若干の変更はあるが、大綱としては殆んど変わっていない。従ってプログラム及び各講義に盛らるべき内容については左程問題はなかったと言ってもよいであろう。事実、この第1回の時に定められた医(薬)学専門講義と文献・図書館業務一般と言う組み合わせはその後連綿と受け継がれ第10回にまで及んでいる¹⁶⁾。問題は講義の科目、内容、方法等より寧ろ講習会の使命及び性格、受講者の受ける利益等、会の存立、運営に関する根本的な事項にあった(紙数が尽きたので項目及び概要を記すに留める。なお項目1~4については実行委員の1人である堀氏(日大)の報告¹⁵⁾を参照願いたい)。

1. 主催及び後援団体 主催は医、薬両図書館協会とし、文部省の後援を要請する。

2. 受講者の資格 現職者なら無制限に受入れるか、学歴、職歴等で制限するか。又受講生の中を更に級別するか。

3. 受講者の継続出席を可能にする為各機関の管理層の諒承を得る方法 小人数の図書館では、1人でも長期不在者が出ると忽ち機能に影響する。抑々実行委員側で対象とし、その出席を期待したのは若手及び中堅層であるが、之等の人達は職場に於ける中心的な働き手であり、その長期不在は職場にとり大きなマイナスとなり、同僚に与える心理的影響も看過し得ないものがあろう。更に国立機関の如く図書館員を事務職としている所で、研修の為の出張は極めて困難である。

4. 履修者の特典 数年間の連続開催に

より、一定期間(当初は5年を予定)内に医(薬)学の専門科目及び文献、並びに専門図書館として必要な図書館業務に関し一と通り終了するよう長期計画を立て、毎年履修科目認定書を発行し、全課程履修者は医・薬学専門司書として特別の資格認定を受けられることを最終目標とする。

5. 日本薬学図書館協議会との共催 講習会発足以来10年間一貫して続けられて来た薬学との協力が何時どのような経緯で始められたか、その間の事情を知るに足る資料が全くなく、又筆者が直接関与しなかった為、本稿に於て明らかにし得ないのは遺憾である。之は薬学方面に最も深い関係を有する小林氏(当時慈恵, 現 JICST)を煩わす他ないであろう。ここでは筆者の実現した範囲内の事柄を記すに留めたい。

前記打合会の記録に見る通り「講習会案」の中の専門科目に化学が加えられ、その講師として東大薬学部の伊藤館長及び富山大薬学部の村上清造の両氏が挙げられている所から、この時(6月11日)には薬学との協力が既に決定していたことは明らかであろう(両協会の共催は後日に持越されたが¹⁷⁾)。

この後幾何もなく講習会準備委員会が組織され(正確な日付は不明)、6~7両月に亘り頻繁に会合を開き、医・薬双方から略々同数の委員が出席協議した。実行委員の選出については、医学の方は前記研究会世話人の間で話し合っただけのもので、理事会の議を経てはいなかった。更にこの後の委員会の決定等も協会に対しては総て事後承諾の形となった為、委員会暴走の批判を受け、後日協会主催、経費補助等の問題解決の際禍根を残す結果となったが、就中薬学との共催については特に大きな障害に直面した。それは薬学関係図書館は規模、性格、資料の内容、館員等多くの点で医学との相違が著しい上、製薬会社と深いつながりを持っていること等に対する

懸念に基づくもので、中には「利用される丈ではないか」などと言われる向きすらあった。確かに 10 年前の薬学図書館の実態を考えれば、この種の懸念、批判は或いは尤もな点があったかも知れない。現に薬学側委員の中でも館員数 2～3 名の所では、館員が 1 人でも休むと予定の会合にも出られないという例さえあった。

然らば薬学との共催は全く無益無意味であったか。少くとも筆者は断じてそうとは思わない。又当時の実行委員の人達も恐らく同意見であろうと信ずる。抑々医薬共催の議の起った背景には、薬学側で医学と殆んど同時期に同じ目的の講習会開催の計画があることが分り、個々に開くよりも共同した方がよいという意見が出たこと、又文部省当局に対して後援及び専門司書資格認定に関し内意を打診した所、一つの特殊な分野（たとえば医学）丈では困難だが幾つかの分野が連合すれば可能性があるという意向が伝えられたこと等があったが、之等は何れも多分に偶発的の或いは便宜的な要素を含んでいた。最大の動機は何と言っても前記「講習会発足前夜の情勢」(3) 図書館資料の拡大と利用の高度化の項で述べた科学技術方面の各分野間に起りつつあった情勢の変化——細分化と総合——であったと言えよう。図書館員が如何に肩を怒らせて医学だ、薬学だと縄張り争いをしても、刻々に移り変って行く周囲の情勢に目をつぶることは出来ない。否周囲どころか毎日館員の机上に持込まれる仕事——受入資料、閲覧者の希望、参考質問等——に如上の変化は明らかに現れている。当時既に医学図書館では薬学及び化学関係、薬学図書館では医学特に臨床医学関係を見捨て得ない状態となりつつあった。そこで従来館単位或いは個人的な連絡によって処理していたのを公式のルートにのせる一方、人材発掘、人事交流の途も開くべきだとの要望が高まり、その為には相互に他の

分野のことを知る必要性が痛感されるようになった。医薬共催の議が起るや直ちに実行に踏み切り、而して昨年まで文字通り 10 年 1 日、一貫して協力の実を挙げ得た原動力は実にこの必要性であったと確信する次第である。

終 り に

今筆者の眼前に置かれてある一冊のノート——その表紙には「日本医学図書館協会理事会会議事録、昭和 32 年 11 月起」と記されている——を手にする時、一種の感慨を禁じ得ない。それは当時理事の末席に連なり記録を担当していた筆者がこのノートに記した昭和 32 年度第 1 回理事会記録（昭 33. 1. 25）中「7 講習会の件」の項に次の如き記事が見出されるからである。

1) 第 15 委員会の名称を「医学 司書向上育成委員会」とする。提案理由の文中の字句より採る。

2) 略

3) 今年度の最重要事業として「向上育成委員会」を取上げる。

思えば 1 年半前、順天堂大学図書館閲覧室に於て芽生えた講習会の双葉は、この日始めて磐石の大地に根を下した。そして講習会を中心とした医学図書館員の研修の洋々たる前途を望み得るに至ったのである。

結 び

駄弁を振り饒舌を弄している中、何時か指定された紙数を大幅に超過した。編集部の御要望の極めて一部分をも満し得たか。又読者諸賢に参考として撰取して頂けるものがあったか、甚だ以て危惧の念を禁じ得ない。この雑文が些かなりとも御役に立つことがあれば望外の喜びとする所である。

文 献

- 1) 石田清一：図書館雑誌，47 (12) 383～9 (1953)
- 2) 同：同 50 (12) 486～7 (1956)
- 3) 裏田武夫：図書館界 5 (4) 124～8 (1953)
- 4) 森耕一：同 5 (4) 128～31 (1953)
- 5) 馬場重徳：医学図書館 3 (1/2) 137～40 (1956)
- 6) 津田良成：同 3 (3/4) 148～51 (1956)
- 7) 奈良医大附属図書館編：日本医学図書館協会 35 年略誌 (1962)
- 8) 日本図書館協会編：図書館ハンドブック 改訂版：80 (1960)
- 9) 医学図書館 2 (1/2) 82 (1955)
- 10) 同 1 (4/5) 15 (1954)
- 11) 同 3 (3/4) 156 (1956)
- 12) 津田良成：医学図書館 3 (3/4) 148～51 (1956)
- 13) 同 薬学図書館 6 (1) 10～14 (1961)
- 14) 谷山高美：医学図書館 1 (1) 3 (1954)
- 15) 堀敬三：医学図書館 3 (5/6) 172 (1956)
- 16) 講習会実行委員会：医学図書館 8 (2) 27 (1961)
- 17) 医学図書館 3 (3/4) 157 (1956)

東 西 南 北

地区だより

<関 東>

久しく開かれなかった「関東地区会」は、「医学図書館 13 巻 3 号，特集：医学図書館協力活動」掲載予定座談会記事「相互貸借の諸問題」とタイ・アップし，4 月 9 日東京医歯大で開かれた。編集委員を含めて 33 人が参集し，1) 今後の区活動（年 4 回，中 1 回は総会前，中 1 回を総会後の区総会にする），2) 第 37 回総会への提出議題，3) 相互貸借の諸問題，などについて論議を交した。「区会のあり方」に対しては，前事務局長裏田氏（東大）が大阪，東北における区会の活発な動きを紹介すると共に，それまでの関東区会の低迷を指摘「文献量，人的資源といった力から見て最も豊かな活動があってしかるべきである」と発言，より一層の活動への喚起を集めた。また「相互貸借の諸問題」にも熱のこもった討議が展開され，担当者同志の体験の交流と提案事項には現場と密着した切実な問題が提起された。特に現物貸借の少なくなっている今日，複写設備，それもゼロックスを中心とした問題も出され，迅速な提供のた

めの，1) 申込用紙の統一，2) 送金方法の統一，3) 書誌データの整備，4) 所蔵していない場合の迅速な連絡，5) 文献分布を考えた申込依頼館の選択，6) 「医学雑誌総合目録」訂正版への要請，この他国立機関の前金制，著作権法，といった問題が討議された。

<大 阪>

第 69 回大阪地区医学図書館協議会例会は 5 月 7 日神戸大医学図書館で開かれ，1) 第 37 回総会への提出議題，2) 「医学図書館」への意見，の二つを討議した。特に「医学図書館」へのコメントとしては，地区のモニターも加わり，a) 執筆者の固定化を防ぎ，長論文は 1 号 1 篇，b) ○学基礎講座式の連載ものの掲載，c) 読者と編集部との通信欄の設置，d) 新しい雑誌の紹介，評価，e) 短い随想の掲載，f) ニュース欄の充実，といった希望が出され，「医学図書館」を自分たちのものとして充実，向上させて行こうとする活発な動きを示した。

地区だより

東 西 南 北